

## 血脈の森

— 富永太郎の家系 —

権 田 浩 美

父も母も成功者とはいえないまでも、「セルフヘルプ」の読者だった明治人らしい独立独学の生き方をして来た人々だった。(中略) まず不服を訴えるような条件は何もなく、世間からも信用のある家庭に見えたにちがいがなかったし、親も家庭の美風をほこりにしていた。／ところが父も母も己れの人生に対して何か不満があった。(中略) その不平懣憤の根は、父も母も揃いも揃っておちぶれものの子弟だったということにあった。(中略) 父は明治三年生れだが、その三年前、明治の改革まで、父の家は尾張藩の勘定奉行で千石とりの家柄だった。多くの家のどこかには今でも父の家の系図が蔵われている。母は美濃国岩村藩でこれは小藩だが、その家老の家で、父母の家には血縁の関係があった。維新後両親の家はどっちも昔日の命脈を保ち得なかった。(富永次郎「親は見られている(九) —父母の歪み—」<sup>(1)</sup>)

詩人・中原中也や批評家・小林秀雄の初期の芸術的営為に影響を与えたことで知られる富永太郎は、明治34(1901)年5月4日、東京で生れた。仏語・独語等語学を得意とし、稀代のボードレリアンとして優れた翻訳を成す一方で、サンボリズムの影響下において抑圧された緊迫感を湛える劇詩にも似た結晶度の高い散文詩を成した。大正14(1925)年11

月12日、24歳で早世することとなったが、決して多くはない残された詩篇で展開された、透徹した冷やかな熱情の輝きに魅せられるものも少なくない。然しながら、富永太郎の伝記面からの研究においては、大岡昇平が最晩年計画していた全集が頓挫してしまったため、『富永太郎—書簡を通して見た生涯と作品—』(昭和49年9月 中央公論社、本論では以後大岡の著作とする)の段階にとどまっているのが現状である。全集編纂のため、一時大岡邸には太郎のみならず富永家関連の大量の資料が一括して預けられていたが、大岡はこの資料全てを精査したわけではなく、そのため間違いも生じている。また太郎の早世のため急遽家を継ぐことになった次郎には、その内実が上手く伝わっていなかったこともある。こうした血脈上の問題については拙論「〈黎明の森〉に眠る〈出生の記憶〉—富永太郎の血脈—」(『研究論集』37号 2014年12月)において既に論じた。数百年間、木曾を治めてきた歴代当主の中でも名君の誉高い山村良由の、山村家の本流から外され二つに分かれた血脈の合流点に富永太郎という男子の誕生があったということだ。それが《おちぶれものの子弟》であることに深い負い目を抱えていた父母・富永謙治と丹羽瀬園(「その」については園、園子等の表記もあるが本論では園に統一する)、そして木曾福島で育った丹羽瀬志津(「しづ」の表記については静、志津、しづ子と表

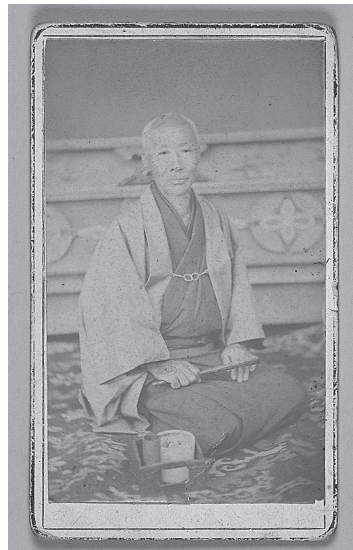
記が異なるが本論では志津で統一する) にとって如何に意味深いことであつたかについても述べた。

本論では、「〈黎明の森〉に眠る〈出生の記憶〉—富永太郎の血脈—」で明らかにした、木曾福島の山村氏の複雑な血脈にまつわる歴史的背景の中で、富永家に養子に出された太郎の父方の祖父・蓬山(幼名:山村謙次、後に兼濟、孫一郎等を名乗るが、本論では隠居後の号・蓬山で統一する)、そして蓬山という父の後姿をみていた太郎の父・謙治、それぞれがその血脈をはりめぐらせることになった大井及び岩村(現在の岐阜県恵那市)での縁と、その意味について先ずは考えてみたい。そのためには大岡の著作以外に、謙治が病床に就いた最晩年に枕頭で次郎が行った聞き書きを基に構想された、謙治の半生を描いた未完の小説「幻化」及び、「幻化」草稿ともいえる未刊行の資料二つ<sup>(2)</sup>、そして冒頭にあげた随想「親は見られている」等が大きな手掛かりとなろう。そして次郎の著作を裏付けるために、謙治による「富永謙治「太郎の父母」ノート」(以後、本論では「太郎の父母」とする)、「富永謙治(富永太郎の父)」「富永蓬山伝」(以後、本論では「富永蓬山伝」とする)、そして「富永謙治(富永太郎の父)日記」(以後、本論では謙治の日記とする)等の神奈川近代文学館所蔵の直筆の未刊行資料も随時参考とした。

一方、恵那市周辺の富永家・丹羽瀬家関連のご遺族とお会いして聞き取りを行うことと並行して、当地において郷土資料等を調査した。それによって、死の床にあつた謙治が語ったことを基にして成った「幻化」に描かれた世界が現実のものであつたことを明らかにし、これを検証しつつ、富永蓬山・謙次の胸の内にあつた想いや屈折が、結果的に太郎にどのように伝わり、影響した可能性があるのか考えてゆきたい。

## 1

謙治直筆の「太郎の父母」において、謙治は妻・丹羽瀬園との血縁関係について《太郎の母は斯る複雑なる血統の葛藤中より謙治に嫁して太郎を生めるなり》(未刊行箇所)と記していた。この《斯る複雑なる血統の葛藤中》の意味については先ほども触れたが、山村家代々の領主きつての名君、後に尾張藩家老となり従五位伊勢守にまで異例の出世した良由の血脈をめぐる問題があろう。冒頭に引用した「親は見られている」を読む限りでは、次郎には《父母の家には血縁の関係があつた》という認識はあつたものの、両親の屈折した家意識に関しては、尾張藩重臣・富永家と岩村藩家老家・丹羽瀬家という二つの家の没落に由来するものと理解されていたようだ。然しながら、謙治の先の一文と伝記に鑑みれば富永・丹羽瀬家をつなぐ山村家をめぐつての問題があることが仄めかされている。そこにこそ謙治の家や血脈にまつわる拘泥、何より太郎誕生の意味があつたことがうかがわれよう。その山村家から富永家に入り、幕末及び維新後の混乱を生きた謙治の父であり太郎の祖父となる蓬山について、先ずは考えてゆきたい。



富永蓬山の肖像写真(神奈川近代文学館所蔵)

富永太郎の祖父・蓬山は、木曾の領主・山村家の第11代良熙と継室・蓬栖院（貞俊院・蓬栖院の名を時期によって使い分けているが、本論では蓬栖院で統一する）との次男として、文政6（1823）年に生れている<sup>(3)</sup>。蓬山が生れた年の正月に、名君として名高い祖父良由（第9代）が没している。しかも、文武共に優れ将来を嘱望されていた同腹の兄・良緒も文政9（1826）年に《廃人》<sup>(4)</sup>となる等、不幸が重なった。折しも山村家の慢性的な赤字体質が失政により悪化。逼迫しているところに天保の大飢饉が重なり家中が混乱している時期でもある。そうした時期に17歳になった蓬山は富永四郎左衛門の養嗣子となり（天保14年）、四郎左衛門の娘を妻に迎えることとなったのだ。この山村家が混乱している時期に蓬山が富永家に養子に入った理由についての考察は、前出の拙論に詳しく述べたのでここでは記さないが、実家の混乱とは関わりなく蓬山は尾張藩内で順調に出世してゆく。嘉永4（1851）年11月から安政元（1854）年6月まで勘定奉行を務め、続く安政2（1855）年4月から同年11月までは御側大寄合（大目付兼）の役職に一旦つくものの、木曾の財政改革を成した祖父良由の才を受け継いでいたのか、余程財政的な手腕をかわれていたのだろう、翌安政3（1856）年1月から勘定奉行に再任され、安政5（1858）年3月までこの職を務めることとなった。体調を崩して文久3（1863）年に隠居し、妾腹の次男・二蔵に家督を譲るものの、元治元（1864）年には隠居の身でありながら強く乞われて御側大寄合（大目付兼）に命ぜられ、翌年までこれを務めた<sup>(5)</sup>。未刊行資料「太郎の父母」によれば、維新後、廃藩置県の際の混乱の中で、勘定奉行として財政に通じていた蓬山の手腕をあてにした岩倉具視が出仕を勧めるが、これを断ったというエピソードも綴られている<sup>(6)</sup>。ともあれ二度の勘定奉行職の経験があることから、財政方面の手腕が評価され重用されていたことは

間違いないだろう。一方、私的なことに目を向ければ、四郎左衛門の娘である最初の妻との間に、二人の子を儲けたものの、流行病コレラによって最初の妻とその子供たちを失い、四郎左衛門の二人目の娘・綾を後妻に迎えることとなった。この綾こそ、太郎の父・謙治の生母となる女性である。

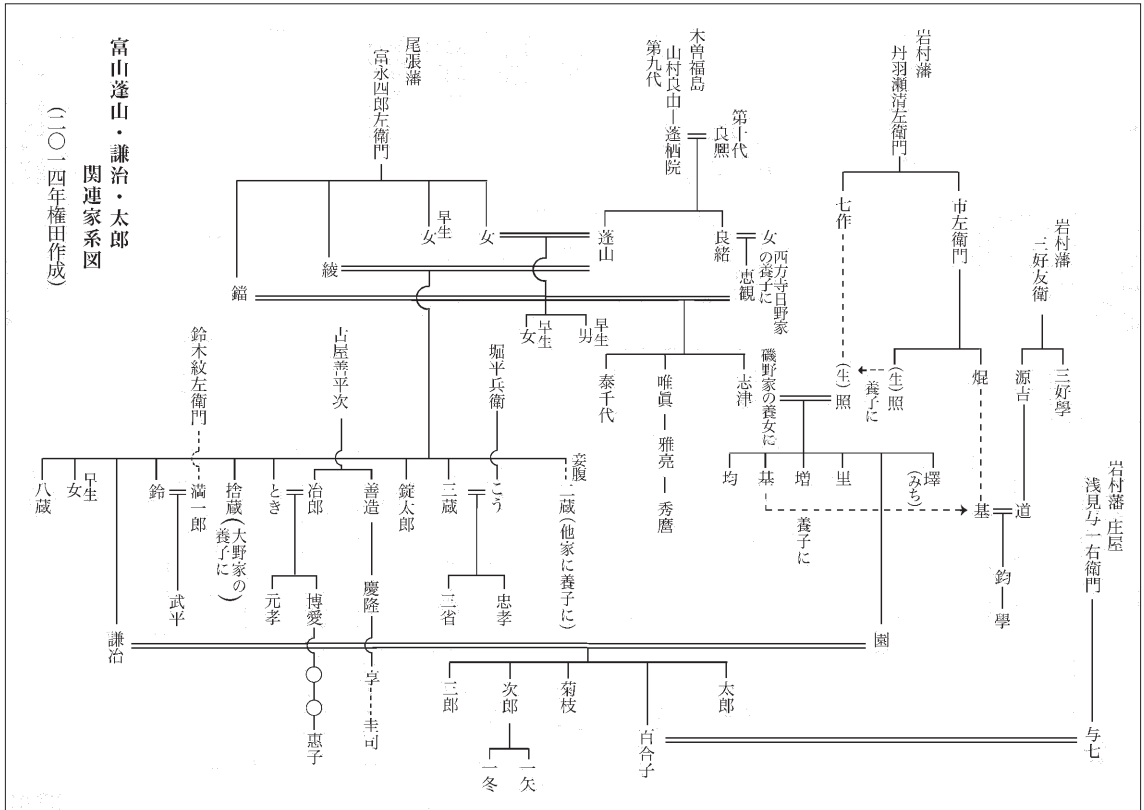
維新後の蓬山の足跡については、謙治を主人公とした小説「幻化」及びその関連資料をみることで、追ってゆくことができる。富永家は時代に移り変わりの中で、没落の道をたどることとはなったが、当初は《禄には離れたものゝ、家産はまだ相当あつたし、廃藩の折貰った禄高に相当する公債からよる利息も入つたから、当分は暮しに窮するやうな憂ひはなかつた》（「幻化」第二章）とされている。1000石取の富永家には《三千円の公債に替へられてをり、これが一割に廻つたから、月取二十五円の勘定》となり、維新から既に十数年経とうと《尚糊口に不安を覚えるやうなことはなかつた》（「幻化」第八章）とある。つまり富永家の経済は差し迫ったものではなかったはずなのに、結果的に没落してしまったということだ。その理由は、明治3年生まれで旧時代の矜持を持たぬまま育った謙治とは異なり、古い矜持を引きずりながら新時代を生きざるを得なかった兄たちの失敗である。このたび筆者が行った現地調査とご遺族への聞き取りを基に、大岡昇平が著作に載せた家系図にはなかつた部分も加えた系図を作成したので、次頁を参照されたい。

幕末に体調を崩した際、一旦家督を譲ったのは妾腹の二蔵（謙治より17・8歳上）であったが、維新後二蔵は事業に失敗したこともあり他家に養子に出され、「幻化」によると《明治一六・七年頃美濃国大井で死んだ》（第三章）とある。ただ二蔵の死については、謙治自身が語るほど記憶が定かでないらしい。二蔵の廃嫡後、三蔵（謙治の12歳上）が富永家の嫡男として采配を振るうようになる。そして、

この三蔵こそが富永家を没落に追いやることになるのだ。器用で機転が利き商売を始めれば一旦は成功を取めるものの、何事も長続きせず、遊興に走る享樂的な三蔵は、富永家の財産を食い潰したあげく、自身の妻子すらも離散させることとなり、最終的には人力車夫にまで身を落とす。そして《明治三八年の春》(未刊行資料「富永謙治(富永太郎の父)「思い出」原稿)に、肺病で亡くなっている(「親は見られている(九)―父母の歪み―)」。また、謙治より10歳上の兄錠太郎は父・蓬山との折合が悪く18歳頃富永家を出奔。12年後に横浜で謙治と再会した際には《チャブ屋の経営者》(「親は見られている(九)―父母の歪み―)になっていたとある。兄の仕事を恥じた謙治は次第に疎遠になるが、錠太郎は《七十三才の高齢に達するまで生存した》(「幻化」第三章)

とあることから、安否確認する程度の付き合いは続いていたのだろう。他に、早々に他家に養子に出された謙治より5歳上の捨蔵と、生来の明晰さゆえに父の愛を一身に集めていた謙治より4歳下の八蔵があるが、病弱だった八蔵は12歳で早世してしまう。富永家の嫡流となる三蔵の子等も一家離散後の悲惨な生活から立ち直れぬまま戦前までに亡くなってしまった<sup>(7)</sup>。残された錠太郎と捨蔵がその後どうなったかまではこのたび調査できなかったが、嫡流の三蔵の子等の早世もあり、富永の姓を名乗る男子は、このたび筆者が調べた限りでは悉く悲惨な没落の道をたどったことになる。数百年間木曾を取めてきた山村代官家の血脈をも引く、尾張藩の重臣富永家のこの没落ぶりはあまりにも痛ましい。

この富永家において、唯一家の名に恥じめ



権田作成の富永・丹羽瀬家関連の家系図

暮らしぶりを保てたのは鉄道官僚として出世した謙治のみであったのである。とはいえ、没落する家を目の当たりにしつつ、そこから這い上がってきた謙治は生涯生家や血脈に対しての屈折したプライドを抱え込むこととなった。一方で、謙治には大井周辺の名家に嫁いだ姉二人がいたのだ。

## 2

地方の同人雑誌（「叡智」）での掲載とはいえ、おそらく親類筋に配慮したのだろう、唯一世に活字で発表された「幻化」において、次郎は歴史上の人物以外は登場人物の名に変名を施している。この「幻化」に加え、「幻化」の草稿ともいえる先述の二つの資料と照応したところ、大井周辺の登場人物が実在すると共に、「幻化」で展開された世界が現実のものであったことを、このたびの現地調査で確認できた。「幻化」では《古井》とされているが、謙治より7歳年上の姉とき（最初とめだったが、後にときと改名。本論ではときに統一する）は、明治12年に美濃の富豪古屋家に嫁いでいる。美濃の富豪として知られる古屋家の嫡流は、明治期に岐阜県議になった善平治の長男善造の代より、現在に至るまで代々国会議員を輩出している（古谷善造、古屋慶隆、古屋亨、現職の国会議員古屋圭司と続く）名家である。維新後の世の移りかわりの中、岐阜県議となった善平治は、近隣・岩村藩の家老家の一つ黒岩家から長男・善造の嫁を迎えていた。《地方の富豪連にして士族の門閥高き家の娘に結婚を求め家門を飾らう》という考えによるものだが、富永ときが嫁いだのは善平治の次男・治郎であった。《善平治の次男は後妻の生むところで、その後妻が是非とも自分の所生には長男よりも更に門地高き家より嫁を娶らうとして、尾張藩でも千石以上の家を物色し》（「幻化」第四章）た結果だ。由緒正しくはあるものの地元の小藩岩村の家老家

は、幕末の時点で黒岩家300石、丹羽瀬家250石であったのに対し<sup>(8)</sup>、富永家は1000石だったのだから、富永家が如何に裕福であったかが知れよう。しかも、代々美濃に本拠地を置いていた古屋家にとっては、富永ときには更なる価値があったはずだ。数百年間木曾を治めてきた領主・山村代官家の血を引く娘、しかも、名君として名高い良由の血脈を継ぐ娘だったのだから。

《尾張藩の家臣でもあるが、幕府の直轄している福島関所の守衛の任務を帯び、幕臣として江戸城柳の間詰という大名格の席次》を持つ山村家は、《江戸に二千七百二十三坪、福島に四千四百三十二坪の屋敷の外、名古屋に三千四百七十七坪という広大な屋敷を元和元年以来拝領》（木曾福島町教育委員会編集『木曾福島町史』第2巻（現代編1）昭和57年10月株式会社ぎょうせい 35頁）していた大家であった。然しながら、所謂天保の難による弱体化を引きずったまま明治維新を迎え、明治3・4年には木曾福島の屋敷も打ち壊される等の時代の荒波に翻弄され、最終的には明治12年2月の郡区町村編制法（明治11年7月公布）によって時の当主山村良貴は初代岐阜県恵那郡長となり、大井に赴任することとなる。

富永ときが大井の古屋家に嫁したのは、正にこの明治12年。しかも富永家に対して《待遇は至らざるところなき鄭重を極めた》態度をとっていた古屋善平治が、《親戚の者の家を譲り渡すことまで提議して》（「幻化」第五章）勧めたこともあり、富永蓬山は翌13年に一家をあげて大井に移住する。生来病弱だった妻・綾は寒冷地の大井の自然環境を危ぶみ反対した（結果的に移住して間もなく綾は寒気がもとで体調を崩しそのまま永眠することとなる）が、蓬山が押し切る形での移住であったという。蓬山には生まれ故郷に近く、また実家の山村家が郡長として在る地への強い執着があったのではないか。何故ならば、この大井時代に蓬山はもう一人の娘・鈴（謙治より3

歳年上)までをも、《旧幕時代に馬場美濃守と称する旗本の所領であった》《大井より三里程距てた釜戸》(「幻化」第六章)の、馬場美濃守の家老・鈴木紋左衛門(「幻化」においては鈴田に変名)の養嗣子・満一郎に嫁がせているのである。釜戸を治めていた馬場氏(知行高1600石)は、所謂木曾衆に数えられることもある一族である。江戸時代の釜戸一帯は山村氏をはじめとする木曾衆の諸氏にはじまり、尾張藩、岩村藩、天領と複雑に分割統治されており、山村家を実家とする蓬山にとってはかつての実家の知行地として心情的に親しみがある。何より、釜戸にはかつての領主に礼節を尽くす風が残っていたのである。釜戸の庄屋小川兵蔵が記した「晴雨日記」(慶応4年～明治21年)<sup>(9)</sup>を紐解けば、維新後20年経っても兵蔵たちが「殿さま」であった馬場一族に対し礼節を尽くす様子が綴られており興味深い。鈴の舅・鈴木紋左衛門の名も幾度となく登場するが、鈴木家は《高台の景勝の地にあつて、いかにも御家老の家らしい閑雅な住居》(「幻化」第六章)であり、馬場一族も帰濃した際には宿泊する<sup>(10)</sup>こともたびたびあったようだ。ちなみにこの日記には、後に謙治の妻となる園の祖父・丹羽瀬市左衛門も《丹羽瀬の御隠居》の名で登場している。

ここにもうひとつ、そうした蓬山の胸の内を垣間見ることのできる資料がある。初代恵那郡長であった山村良貴の後任となった神谷道一の記した『郡長日記『懐紳』』(翻刻・解説:中島勝國 1996年10月27日)である。神谷は、嘉永7(1854)年に久々利(現在の可児市)を治めていた千村家の家老を務めていたが、維新後は可児郡長(明治12年)、恵那郡長(明治14年)、飛騨郡長(明治16年)と郡長を歴任し、岐阜の地方政界において手腕をふるった人物である。神谷は尾張藩の岡部諷訪を母として文政6(1823)年に生れていることもあり(明治37年9月17日没)、尾張藩には馴染み深く、少年時代《名古屋の儒

学者でもあり書家でもあった丹羽盤恒の門に入り一七・八歳のころには塾頭格となっていた》(『郡長日記『懐紳』』一頁)という。実は富永蓬山も神谷と同じ文政6年生まれのうち、《生れ歳十七才にして名古屋に至り丹羽盤恒子(通称嘉六)について漢学及書道を学ん》(「幻化」第一三章)でいる。つまり二人は同じ年の同門でもあり、面識があった可能性が高い。それを踏まえて、『懐紳』の明治15年8月14日の項を読むと、興味深い。

十四日晴 大井村へ出張旧勘定ニ付臨時会ヲ開ク、周村長国寺ニ於テ之ヲ為ス、各組ノ議員三十名議長林良太郎・副議長古山太郎ニ、午飯後開場 午後六時閉場、入夜戸長古屋善蔵・富永蓬山・長谷川久一郎・伊藤弥兵衛等来ル酒ヲ酌(『懐紳』)

出張先の大井での仕事を終えた後、長国寺において酒席となるのだが、その席には戸長の古屋善蔵(善平治の長男、善造と善蔵と表記に揺れがある)と共に、富永蓬山も加わっている。同じ年で同門の郡長に、娘婿の兄・善造と共に酒を酌み交わすようなひと時は、この地でなければ実現しないものであったに相違ない。然しながら、結果的にこの大井移住は蓬山にとって失敗となる。

次頁の《明治五壬申二月□ 岐阜県管轄第三百三十区 馬場山田村 大井村 美濃国恵那郡正家村 茄子川村 千旦林村 合五ヶ村図面》<sup>(11)</sup>という題された絵地図を参照されたい。明治4年4月4日の太政官布告による戸籍法が公布され、明治5年に所謂壬申戸籍が編製されたがその際作成された番戸制の絵地図である。ここには古屋善平治、古屋治郎、堀平兵衛等、「幻化」に登場する人物の名が記されており、「幻化」で展開された世界が現実のものであったことが分かる。

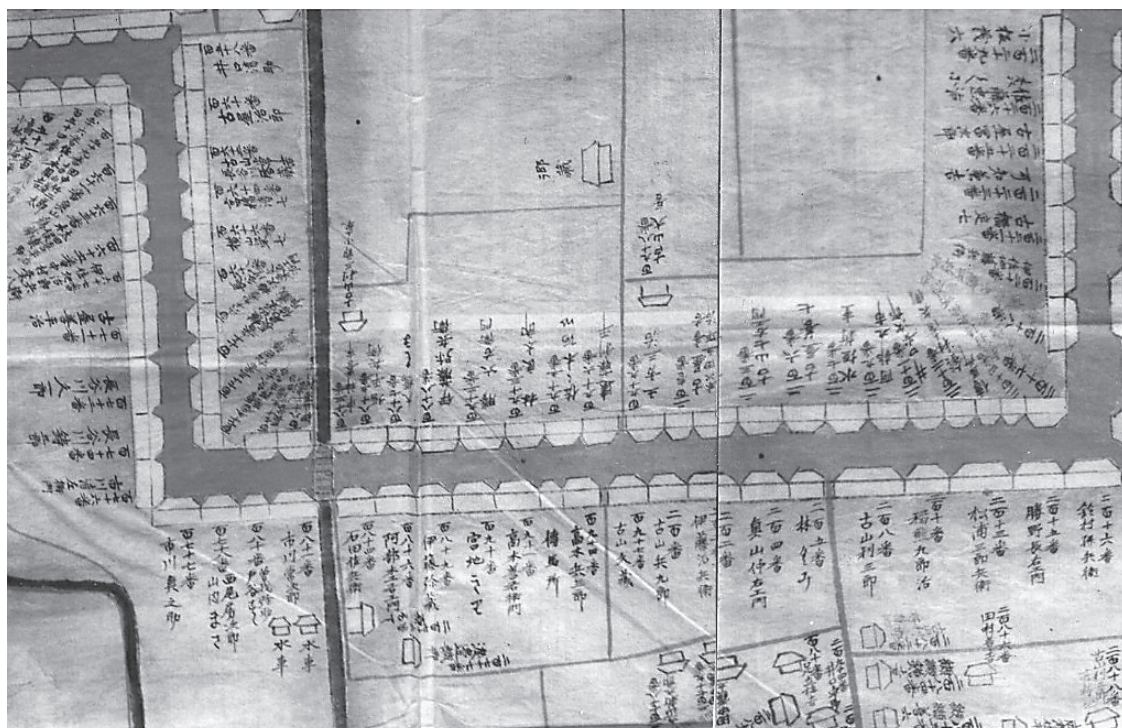
移住後間もなく妻を亡くした蓬山は、再び跡継ぎの三蔵の不行跡に悩まされることにな

る。大井で始めた商売は一旦上手くいったものの、飽きっぽい三蔵は仕事を放り出したあげく、明治15年、《同じ大井の染物兼鍛冶業の堀野平兵衛の娘こう》<sup>(12)</sup>と結婚してしまう。蓬山は《身分違ひの商家から嫁を迎へるのは全くの反対であつて、正妻とするには足らぬ、妾として入れると主張した》(「幻化」第六章)が、時勢には逆らえなかった。三蔵はやがてこの実家に入り浸るようになり家業を放棄。これにより蓬山は大井での暮しに絶望し、明治17年には末子・八蔵を連れて再び名古屋に戻ることとなった。山村家を出自とする蓬山にとって、大井への移住は、その誇りとする血脈を尊重してくれる地縁の中で余生を過ごすという望を託してのことであつたろう。しかし、古屋家や堀家といった商家から、《旧幕時代と全く転倒した》中で《こちらを低く視下すやうな態度も次第に表はれ》《思はぬ侮辱も受けねばならぬ》(「幻化」第六章)くなり誇りは

傷つけられた。

大井での物語は蓬山が名古屋に引き上げた後、間もなく終わる。放蕩者の三蔵は大井や釜戸の縁者と結託し蓬山の財産の乗っ取りを目論むが、謙治の気転と大胆な行動で阻止されるという事件をはさみ、謙治も名古屋に戻るようになったからだ。三蔵は事件後、一旦は廃嫡されるが、蓬山が溺愛していた末子・八蔵の死を経、何より謙治自身が学業のための上京を希望して後継者を辞退したため、親族会議を経て再び富永家の後継に返り咲いた。この明治19年の親族会議の折、謙治にも財産分与がなされた<sup>(13)</sup>が、謙治を追うように上京してきた三蔵の不行跡により、分与された財産も食い潰されてしまい謙治は大変な苦勞の中で学業を修めなければならなくなるのだ。

こうした経済的窮地の折に謙治が助けを求めることが出来たのは、古屋家に嫁いだ姉・ときであつた<sup>(14)</sup>。時に謙治の苦境をも救つて



「旧名古屋管下恵那郡村々絵図 大井村 正家村 千旦林村 茄子川村 馬場村／明治五・二(132×76)他五葉／3・48-9」(岐阜県歴史資料館蔵)

くれた姉と謙治は終生あたたかな交流をもち続けたようだ。大正年間の謙治の日記（神奈川近代文学館所蔵 未刊行資料）には古屋の甥たちの住所が住所録の欄に記され、その交流の様子が知れる<sup>(15)</sup>。「幻化」の第六章には《昭和二十年、かの大東亜戦争の終結した年の秋、私はふと思い立つて殺人列車の人混みにもまれながら久方ぶりに大井を訪れた。昔ながらの古井の家に身を寄せてをると、或る日黴くちや婆アさんが私を訊ねて来た》という記述がある。昭和17年に既にときは亡くなっているが、それでも古屋家に滞在するほどの付き合いが続いていたことがわかる。

このたび古屋ときの子孫に当られる古屋恵子氏にお話をうかがうことができた。恵子氏は、ときの曾孫にあたる伯母様から、伯母様の幼い頃、謙治が古屋家を訪問した折には一家をあげて歓待していた様子をうかがっていたという。古屋家には謙治の書も残されており、如何に謙治が大切にもてなされていたかも分かる。次郎は、「親は見られている」のなかで厳格な性格ゆえに人間関係が上手くいかず、謙治の晩年がひどく寂しいものであったことを再三記しているが、姉の家族には終生変わらずあたたかく迎え入れられていたのである。ときが亡くなり、敗戦を経て間もなく謙治自身もこの世を去った。木曾の領主である山村家の血脈を継ぐ人々の物語も、記憶も、次第に時の中に埋もれてゆく。然しながら、山村家を出自とする誇り高い蓬山のもとで、家の没落の有様を見ていた謙治は、蓬山と同じくこの思い入れ深い美濃の地に、不思議なことに新たな縁の根をはりめぐらせてゆく。

### 3

自然豊かな大井での生活は、謙治の生涯の中で特別な輝きを放つものであった。何故ならこの大井時代に謙治は生涯通じて関心を持ち続ける趣味を得ているからである。しかも、

謙治が誇りとする鉄道の仕事と不思議にリンクするかたちで。然しながら、古い家系への誇りを密かに抱き、《腹の底では明治という時代を成り上りものの社会》（「親は見られている（九）—父母の歪み—」）と侮蔑していた謙治が、新時代の〈近代〉化の表象ともいえる鉄道を生涯の仕事として選んだことは、或る意味皮肉なことのように思える。明治末年までに日本列島には鉄道網がはりめぐらされ、それによってもたらされた流通により、日本は〈近代〉化を推し進めていったのだから。そうした鉄道の仕事を誇りとした謙治の趣味が、自身の血脈の原郷や家の思い出にもつながる山野草をはじめとする和の植物の栽培であったとはまた興味深い。

資性植物を愛好し藩邸内には小規模の植物園めきたるものあり、よく草木の性能を諳んじ之を語ること詳密なり、本草なる語は常にかの女の口頭に上る蓋し伊藤圭介に負ふところあるべし。（富永謙治「太郎の父母」）

《蘭医シーボルトの門下たりし伊藤圭介（後の理学博士、男爵）は日夜家庭に出入せしを以てその影響》（「太郎の父母」）を病弱だった謙治の母・綾に与えていたという。享和3（1803）年に名古屋呉服町に生れた伊藤圭介は、蘭医として尾張で初めて種痘を行う等の先進医療を施す一方植物学に精通しており、維新後は小石川植物園に東大理学部員外教授として勤務し、多大な功績を残した。その功を以て、明治34（1903）年に99歳で没する際には、東大名誉教授の称号と共に正四位勲三等男爵の位を与えられた人物である。尾張藩の勘定奉行であった蓬山の妻のもとに藩医であった伊藤が訪うのも領けよう。しかもこの伊藤圭介の父・西山玄道はもとは美濃の久々利の生まれ、西山家の養子となって後、名古屋に出て医院を開業した人物である。久々利は所謂木曾衆の一人千村氏の所領である。蓬



山の実家山村家とは深い因縁を抱えてはいるものの、木曾衆の縁という点では近い。伊藤は父の出自もあり、尾張藩の材木の伐採作業にかこつけて生涯に何度も木曾に採葉に訪れており、その縁は深い。蓬山とも話があったろう。この伊藤の影響下にあつて植物に通じていた母を慕い、また母からも格別の愛情を受けていた謙治は幼い頃から植物に関心を持つことになる。それが、大井移住をきっかけにして山野草への関心を一気に深めることとなったのだ。神奈川近代文学館所蔵の謙治の日記をみると、高名な植物学者が謙治の栽培する植物を見学を訪れたこと、その学者たちと植物園に同行する等の親交ぶりが書き留められている。お孫さんの一矢氏もそうした訪問を記憶しており、謙治の植物学の知識や栽培は素人の域を超えたものであつたようだ。一方、木曾福島生れの太郎の母方の祖母・丹羽瀨志津もまた《風流人にして花を愛して培養を楽しむ、この点謙治に恰好なる論敵なりき》(「太郎の父母」)と記されている。詳細は後述するが、志津の娘である園も植物に対して並々ならぬ関心を有しており、丹羽瀨家を介しても植物との縁は非常に興味深いものがあるのではない。

大正11年8月、富永太郎のすぐ下の妹・百合子は、後に東京帝国大学教授となる浅見与七と結婚する。大岡は著作の中で《母園子の実家丹羽瀨家の郷里、岩村の庄屋浅見与一右衛門の三男。この頃は鍋島侯爵の私設農園の囑託》(103頁)と説明しているが、この縁組に深く食い込んでいる地縁の問題と共に、植物学、そして鉄道関連の縁までもが絡んでいたことを、はたして大岡は気づいていたのだろうか。このたび、神奈川近代文学館所蔵の謙治の大正年間の日記も調査対象としたところ、筆者が読み取った範囲内ではあるが浅見与七の名前は大正元(1912)年の9月から登場しており、謙治と与七はこの時既に面識を有している。謙治はこの年の9月10日から12日

にかけて、仕事からみて名古屋(10日)から大井(11日)そして岩村(12日)を旅している。大井に着いた際、《顧スレバ三十三年の昔》と感慨深げに綴っていることから、明治12年から数年間過ごした大井への33年ぶりの訪問であつたことが知れる<sup>(16)</sup>。ともあれ百合子と与七が結婚する10年も前から、謙治は後に娘婿となる与七を知っていたことになるが、これは与七当人に関心があつたというより、与七の父・与一右衛門との関わりではないか。

というのは、明治35年12月に中央線の名古屋一中津川間が開通しているのだが、中央線が大井を経由したため岩村は外れ、岩村は活気を失うことになった。それを憂いた浅見与一右衛門は岩村と大井を結ぶ線「岩村電車」の開通に私財をなげうって取り組み、明治39年12月に「岩村電車」が開通・営業(電車開通式は明治42年11月6日)することとなる<sup>(17)</sup>。与一右衛門は謙治が大井に居た明治12年には岐阜県会議員、明治20年に県会議員議長、明治26年には衆議院議員となる等、既にこの地方の名士だったのだから、後年鉄道官僚となった謙治は与一右衛門の功績について関心を持っていたに相違ない。しかも、与一右衛門は政治や経済的活動だけではなく文化事業にも熱心で、明治22年2月には丹羽瀨園の父・生照の祖父であり、佐藤一斎門下の岩村藩の家老・丹羽瀨清左衛門の藩政改革を讃える碑を、岩村の有志と共に建立している<sup>(18)</sup>。ちなみに謙治の父蓬山の同腹の兄良緒もまた、佐藤一斎の門下生であつたという。更には、与一右衛門が清左衛門を讃えた返礼でもないのだろうが、大正8年、岩村に与一右衛門の銅像が建てられる際には、今度は丹羽瀨清左衛門の孫・焜(生照の実兄)の筆による銅像銘が、台座の銘板に刻まれることとなった<sup>(19)</sup>。謙治が大正元年に岩村を訪れ、与七等と会っていたのは、こうした浅見家と義弟が養子に入った丹羽瀨本家との交遊にも関わりがあつたのではないか。

不思議な鉄道と植物の縁はまだ続く。浅見与七は後に東京帝国大学理学部付属植物園の園長を務めることになるが、同じ職に、大正11年、与七の先輩にあたる岩村出身のもう一人の偉大な植物学者・三好學が就いていた。しかも、太郎の母・園の実弟であり、丹羽瀬本家の焜の養子となっていた基の妻は、この三好學の姪にあたる道（明治30年9月1日生れ、昭和48年1月18日没）という女性<sup>(20)</sup>なのだから。小石川植物園は大正8年に東京帝国大学理学部付属植物園と改称されたが、謙治の母綾と交流を有していた伊藤圭介の務めていた植物園でもあった。そう考えると、太郎の父方の祖母と交流の在った伊藤圭介に始まり、太郎の母方の叔父・丹羽瀬基の妻の伯父である三好學、そして太郎の妹・百合子の夫である浅見与七と、木曾・美濃という地縁に連なる縁が不思議なことに植物学ともつながっていることが知れよう。大正元年の大井・岩村訪問の旅は、謙治にとって自らの血脈を改めて意識するきっかけとなったのではないか。何故なら謙治は、翌大正2年一家をあげて、自らの血脈の源流に当る山村家の本拠地木曾福島にある日野家（丹羽瀬志津の生家）を訪ね、《長期滞在》<sup>(21)</sup>しているからだ。次郎には、《父親はまた同郷人や同窓人だの、何かと人々が寄りかたまつて一つの勢力を形成したがるのを苦々しく》（「親は見られている（九）—父母の歪み—」）思っていると見えていたが、実際はそうではなかったのだ。そこに謙治と園の屈折した胸の内が見え隠れしよう。

#### 4

代々木富ヶ谷の家は三百坪ほどの敷地に庭を広く取り、盆栽と高山植物を育てた。数十鉢に、炎天下に水をやるのは園子の役目であった。太郎はその様を縁側で見て、「余輩成長の後、自己の趣味のために妻子を苦しめず」と叫んだという。これは謙治自

身が回想している言葉である。

この後、太郎の生涯は父への反抗が一つの特色になるのだが、謙治は長男の性格と才能に絶対の信頼を寄せ、このような言動にもその志を認めているのである（太郎の言葉が文語で写されているところに、父親の教養の質が示されている）。しかし「おれにえらくなれ、といつたやつを打ち殺してやりたい」と太郎は一九二三年頃、友人村井康男に洩らしている。（大岡昇平『富永太郎一書簡を通して見た生涯と作品一』31頁）

ここで大岡が引用している謙治の《文語》の回想は、多少文言が違っているが、謙治の著した「太郎の父母」が出典であろう。

園は理科の学問を好み就中興味を有し教授の導くままに深くその秘奥を探らんとする念やまず、分類に解剖に標本の採集に餘念なかりき、結婚後かの女の蕙蓄は謙治の植物意欲を刺激すること熾烈にて植物盆養は俄然その数を増し一時は二百有鉢に達し夏時炎熱の季には単に灌水のみにても一大困難事にして夫の趣味に殉じて培養の衝に當りしかの女の顔色はたちまち黒褐色に変じお茶の水焼盥紙手の綽號を受くるに□るも宮々として止まず、その美はしき殉情の精神は実に神々しきものなりき、この実況を見て、長子太郎は憤慨して曰はく余輩成人の後、自己の趣味の為に断じて妻子を苦しめずと、這箇の消息はかの女の性格を説明して餘あり（富永謙治「太郎の父母」）

もともと植物を愛好する気質のあった園は結婚を機に一層関心を深め、夫妻で多くの植物を栽培することになる。大岡の著作では《数十鉢》となっているが、実際には《一時は二百有鉢》まであり、夫妻の植物への愛好は並々ならぬものといえよう。水やりは園の仕事だったようだが、真つ黒に日焼け（実にユーモラ

スな表現になっている)しても《営々として止》めないその姿を、夫の趣味に心から寄り添う《美はしき殉情の精神は実に神々しきもの》とまで謙治は受けとめている。この妻の園について語っているあたりは(他に記されたエピソードも含めて)、読んでいて微笑ましささえ筆者には感じられるほどであった。ともあれ「太郎の父母」においては、《這箇の消息はかの女の性格を説明して餘あり》という締めくくりの言葉からも、愛する妻の一途さや微笑ましい思い出を謙治は綴ったにすぎない。太郎はこうした父母の愛や結びつきに気付かずに言葉を発していることになるが、息子の母を思い遣る心にも理解を示す謙治はこの妻との思い出の情景を彩る一文として挿入しているだけだ。つまり大岡の《長男の性格と才能に絶対の信頼を寄せ、このような言動にもその志を認めている》とまでは筆者には読めない。とはいえ、ここにみえる太郎の父への反発めいたものが、夫妻が並々ならぬ熱意を以て育てていた、山野草をはじめとする双方の血脈の原郷ともつながる植物群と関わるものであることは、如何にも興味深い。また、太郎が仙台の二高に入学した際、最初は理科乙類、つまり医学や植物学を志望するものが入るクラスに所属しながらも、後にクラス変更を希望した複雑な経緯について、大岡は著作の中で《父親が植物学を好み、その方面での学者にしようと思ったのではないか》(13頁)という母方の叔父・丹羽瀬均の話を紹介している。丹羽瀬均の言という意味でも、これも興味深い説ではないか。

《新時代を肯定し、機会均等の社会を信じながら、その実腹の底では明治という時代を成り上がりものの社会だと視る風が去らなかった》(「親は見られている(九)―父母の歪み―」)謙治と園の築いた家庭は、生来の病弱もあって両親の庇護のもとで甘やかされて育った次男である次郎にとってさえ、息苦しさを感じるものであったようだ。そうであるならば、

長男として生まれ、しかも利発で体格もよかったため両親の愛情と期待を一身に受けていた太郎にとって、次郎が《父母の歪み》とまで評した屈折した家意識に基づく多大な期待は、如何ばかりに重く感じられたであろうか。おそらく、次郎が感じていたのとは比べものにならないほどの重圧であったことは容易に想像できる。

郷土の地中深くはりめぐらされた植物の根は、微細な血脈の根と複雑にからみあうようだ。そこからのびる根や枝葉は正にアラベスク(唐草文様)となって、やがて自らを圍繞するもののように太郎には感じられたのかもしれない。百合子と与七の婚姻が成った大正11年の8月、最も仲の良い妹であったにもかかわらず、太郎は結婚式に出席せず、伊豆大島旅行に出かけてしまう。そして、同年9月に「無題(ただひとり黎明の森を行く)」、11月に「無題(幾日幾夜の熱病の後なる)」、12月には「横臥合掌」を制作するのである。《出生の記憶》を甦らせる、生々しい植物群の生い茂る深い森を舞台とする「無題(ただひとり黎明の森を行く)」。「無題(幾日幾夜の熱病の後なる)」 「横臥合掌」においては、語り手の身体を圍繞するものは卵と植物のイメージであらわされる。こうした詩篇がこの時期に集中することの意味を、伝記上の観点から考えることも可能なのではないか。

《反逆がしばしば芸術を生むという意味で、兄の詩人としての形成には家庭の厳しい拘束が何らかの役割を果たした》と考える次郎が、「横臥合掌」の詩世界を《よくてもわるくても弟の眼から見ると閉ざされた庭のにおい》《わが家の風》を感じ、《分明ならざる肌合いにも家の風が沁み込んでいる》(「親は見られている(最終回)―鎮魂歌―」)と評しているのも、また興味深い。

母上へ。私の骸は、やつぱりあなたの豚小屋へ返す。幼年期を被ふかざらずの抱擁<sup>だきしめ</sup>

の、記憶と共に。(富永太郎「遺産分配書」)

次郎はこの「遺産分配書」を例示し、《これらの言葉の内容が示す両極の中に、兄は自己の成因を知っていた。それ以上の註釈は不要だろう》(「親は見られている(最終回)―鎮魂歌―」)と綴っている。太郎の詩世界の森は、母胎的な時空として彼を圍繞し続けた。そこに閉ざされる安寧から得る悦楽と、生温かな圧迫と閉塞感への嫌悪と反発という両義的な感覚の闘ぎあいの中で、太郎は〈遁走〉をくり返す。そして、この時空からの再生を願ったものの、結局のところ、この詩が示すようにそれは放棄されたまま、その生涯を閉じることになったのである。

#### 【註】

- (1) 富永次郎著「親は見られている」(神奈川近代文学館所蔵)は、雑誌に掲載された13回にわたる連載であるが、神奈川近代文学館所蔵の切抜帳(第1回から第9回までと、第10回から最終回まで2冊の切抜帳に分けて貼付してある)に貼付されたかたちでしか現物が確認できない。この切抜帳には掲載雑誌の情報がどこにも記されていないため、現在のところ初出の雑誌は不明である。切り抜かれた紙面には誤植を直す等の手入がなされており、いずれは単行本化等を計画していたのではないかと推察される。
- (2) 「幻化」は、九州の同人雑誌『叡智』において、昭和23年9月に刊行された3巻8号から、3巻10号までの3回にわたって掲載された。なお、第2回にあたる3巻9号については雑誌そのものが見つからず、神奈川近代文学館所蔵の次郎による切抜帳に貼付してあったものを参考とした。また、「幻化」が成るまでの資料として未刊行資料「富永謙治(富永太郎の父)「思い出」原稿」と「富永謙治(富永太郎の父)「明治の人」原稿」がある。拙論「〈黎明の森〉に眠る〈出生の記憶〉―富永太郎の血脈―」に、「幻化」が成るまでの成立過程について述べているので参照されたい。
- (3) 謙治の「太郎の父母」(神奈川近代文学館所蔵未刊行資料)によると、蓬山は明治21年8月3日に東京の市ヶ谷で没している。享年65歳。
- (4) 木曾福島町教育委員会編集『木曾福島町史』第1巻(歴史編)(昭和57年3月 株式会社ぎょうせい)、234-235頁。
- (5) 名古屋市博物館編『尾張史料のおもしろさ』(2004年11月 名古屋市博物館)中の「尾張史料調査便覧」。
- (6) 「太郎の父母」(神奈川近代文学館所蔵 未刊行資料)。
- (7) 神奈川近代文学館所蔵「富永謙治(富永太郎の父)「明治の人」原稿」(未刊行資料)。
- (8) 樋口薫『岩村城の歴史』(昭和45年9月初版/昭和61年8月4版 あげぼの書房)。
- (9) 現在この原本は紛失。そのため、瑞浪市図書館所蔵の解説・解説:佐藤実「(抜粋)晴雨日記」(平成12年1月3日)というガリ版刷の現代語訳から引用した。
- (10) 明治9年12月16日の項目には、かねてより釜戸の他所に滞在していた馬場八十吉と乳母が鈴木家に移ったこと等が記されている。また「幻化」第六章には、大井での生活に嫌気がさした蓬山も一時期鈴木邸の半分を借りて住まっていたこと等が記してあることから、こうした賓客を長期間迎えることが可能な邸宅であったことがうかがわれる。
- (11) 岐阜県歴史資料館所蔵。「旧名古屋県管下恵那郡村々絵図 大井村 正家村 千旦林村 茄子川村 馬場村/明治五・二(132×76) 他五集/3・48-9」。
- (12) 「幻化」では《堀野平兵衛》であるが、実名は堀野平兵衛。『恵那市史 通史編第三巻(下)』(727頁)によると、明治17年から21年頃まで大井町村会議員にもなっているため、大井では力を持つ家であったことが推察される。
- (13) この後継を決める親族会議でつくられた誓約証(明治一九年三月廿日付 未刊行資料)が神奈川近代文学館に残されている。親族証人として、古屋治郎、中村捨蔵、鈴木満一郎、住山信豊の名が記されている。
- (14) 「富永謙治(富永太郎の父)「明治の人」原稿」の《商業学校時代》の章に、「遂にたまりかねて二十円の融通を受けてやうやくその難関をきり抜けた」(未刊行資料)とある。
- (15) 謙治の日記(神奈川近代文学館所蔵未刊行資料)、大正4年10月21日の欄には、古屋家からシメジが送られてきたこと等が記されている。
- (16) 謙治の日記(神奈川近代文学館所蔵 未刊行資料)。
- (17) 永田宏『浅見與一右衛門翁と「岩村電車」』(平成9年12月 岐阜県恵那郡岩村町)29頁。
- (18) 西尾精二編集責任者/歴史掘りおこし委員会『歴史掘りおこし読本』第2巻(平成23年3月31日 城下町ホットいわむら・岩村町まちづくり実行組織)91頁。
- (19) 注(17)と同じ、15頁。
- (20) 西尾精二編集責任者/歴史掘りおこし委員会『歴史掘りおこし読本』第3巻(平成24年11月

1日 城下町ホットいわむら・岩村町まちづくり実行組織) 95頁。丹羽瀬道は、植物学者の三好學の実弟源吉氏の娘であること等が、系図で示されている。丹羽瀬道の生年や没年については、基と道のお孫さんにあたる丹羽瀬學氏にご確認いただいた。ちなみに、三好學の長女百合江は玉川電気鉄道初代社長・津田興二に嫁いでいる。

- (2) 拙論「〈黎明の森〉に眠る〈出生の記憶〉—富永太郎の血脈—」(2014年12月『研究論集』予定)において、木曾の地と太郎の血脈については詳述した。参照されたい。

- \* 富永太郎の詩については『現代詩文庫1006 富永太郎』(昭和50年7月 思潮社)、その他については大岡昇平の『富永太郎—書簡を通して見た生涯と作品—』(1974年9月 中央公論社)、また未刊行の箇所については神奈川近代文学館所蔵の関連資料を本文とした。
- \* 本論を執筆するにあたっては、富永一矢氏ならびに、富永家のご親戚にあたる日野秀麿氏とご家族、古屋恵子氏にお話をうかがい、丹羽瀬學氏には戸籍を確認していただく等、格別の配慮を賜りました。また、木曾福島の川村弘士氏・千村稔氏、岩村の「西町歴史掘りおこし事務所」の西尾精二氏・隆崇院のご住職桂芳彦氏、恵那市の伊藤英晃氏にもご協力をいただきました。そして、未刊行箇所の引用掲載においては、富永一矢氏と神奈川近代文学館に許可をいただきました。ここに記して深謝申し上げます。